レズビアンの不可視性
――1990-2000 年代日本におけるコミュニティの変化と「LOUD」の活動

本論文では、LGBTQ が語られる時にレズビアンが透明化されてしまう原因を明らかにすることを目的としている。昨今、LGBTQ という言葉が世間一般に浸透し、話題として挙げられることや問題提起されることも多くなってきている。しかし、話題や問題提起などの中で LGBTQ としてセクシュアルマイノリティが一括りになって語られる時、ゲイやトランスジェンダーなどと比較してレズビアンが触れられる機会は圧倒的に少ない。そこで、何故レズビアンは他のセクシュアルマイノリティに隠れてしまうのかという問いを設定し、レズビアン当事者へのインタビューから考察を行った。

調査方法は実際に LGBTQ コミュニティの中で活動を行っているレズビアン当事者へインタビュー調査を用いて調査を行った。セクシュアルマイノリティ女性のためのコミュニティスペース「LOUD」の代表者である大江千束さんへアポイントメントを取り、インタビューを行いインタビューをもとに考察・分析を行った。

1 章ではまず今回インタビューを引き受けてくださった大江千束さんと「LOUD」についての概要について述べた。続いて、過去のレズビアンに関する研究としてコミュニティ、レズビアンの社会的地位に関する問題についてインタビューをもとにこれまでレズビアンが抱えてきた問題について述べた。2 章ではレズビアンがレズビアンそのものの主張をするためには足がかりとして「同性愛者」という共通したアイデンティティを持っているゲイや「LGBTQ＋」との集合した行動が必要であるが、そうすることによってレズビアンが抱えている問題は見えなくなっていくということが分かった。3 章では、大江がパートナーシップ制度に登録した際にはじめて周りからレズビアンである自身を認識されたということやメディアの中においてもレズビアンが自分以外の当事者を認識することができないということから、存在が見えにくいことによって当事者でさえも自分以外の当事者に出会うことができずにコミュニティからも外からも不可視化されるということが明らかになった。

これらの結果から、先行研究でレズビアンの女性であるが故の社会的地位や性欲の見えにくさから不可視化されているとされていた事に対して「LGBTQ＋」の中の「Q＋」や「ノンバイナリー」の存在について触れ、その中に女性が多いことから「レズビアン」という言葉が流されてしまうという新たな知見を付与することができる。